特別講座❶

記述問題

標準問題

▲△▲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈鹿児島〉

グローバル化が進み、国境を越えた文化の流れがますます増えることにより、日本発の文化を楽しむ人の多くは日本語を話さず、日本に行ったこともない人が大多数というのが普通になっていくだろう。日本文化を日本の外で楽しみ、日本文学を日本語以外で、日本の外で読む、そんな時代が始まりつつあるのだ。このような時代に、世界の読者の側に立って、文化を見て語る文化論が必要とされている。

では、その世界の読者の視点に立つということは、どういうことなのだろうか。

ここでいう「世界の読者」とは、アメリカとか、韓国(かんこく)というような、どこか特定の国や地域の読者という意味ではない。「日本の外の世界のどこかにいる、しかも、日本の文学・文化とは直接関わりをもたない、想像上の読者」という意味だ。たとえば、いま目の前にある日本語の作品(文学作品、アニメなど)を、「世界のどこかにいる読者がこれを読んだら(見たら)、どのように思うだろうか?」と想像してみよう。そのような世界の読者の視点から日本文化を見ると、日本の読者とはその読みかたが違ってくるはずだ。自分の母語で読む文学作品では、作品の舞台や作家の境遇(きょうぐう)に自然に親近感をもつだろう。外国語の、自分から遠い文化で生まれた作品には、そのような親近感はない。A、時代や国境を越えて読み継がれる、古典や名作といわれるような作品には、文化背景がちがってもなお作品を「読ませる」なにかがあるはずだ。

世界各地で、実際に日本文学がどう読まれ、日本文化がどう楽しまれているか、その実態を知っていても知らなくても、日本文化が世界の読者からどう見えて、どう思われるだろうか、と想像することはできる。このように想像することは、簡単なことのようだが、意識しないとけっこう難しいかもしれない。しかし、①このような考えかたにこそ、いまの「文化」について考えるうえで大事なヒントが隠されている。いまの日本で、「日本文化(文学)の世界の読者」についての情報は、以前より簡単に手に入るようになった。これまでも、「世界で日本文化(文学)がどう読まれているか」というテーマで、世界の日本文化の受容の実態を調査した本は、結構多く出版されてきた。そのような書物には興味深い事例が数多く紹介されていて、学ぶことも多い。B、最近はインターネットを通してそのような情報がリアルタイムで手に入るようになった。しかし、そのような紹介でも、日本人が興味をもちそうな話題を、日本からの視点で語っていることが多いのではないだろうか。たとえば、国内で日本文化が議論されるときには、「日本の文化が海外で人気がある」ことが、「日本はなぜ世界で大人気なのか?」と読みかえられ、「それは日本人(日本文化)の○○のためだ」(○○には、たとえば「勤勉さ」「美的センス」「ものづくりの伝統」などの言葉が入る)というように、②日本文化論的な安易な結論に導いてしまうことが多い。しかし、「日本文化の人気」と、たとえば「日本人の勤勉さ」は本当に関係があるのだろうか。そのような説明は、「日本人はこんな国民だ」という自己像を確認するためであっても、歴史的に説得力のある説明とはなっていないことが多い。そして、海外の識者がそのような説明を聞くと、自慢話のように聞こえてしまうのだ。こうした文化の語りかたは、「世界で人気がある」といっても、日本中心の視点を離れていない。最近の日本発の文化についての議論でいちばん欠けているのは、「あえて世界の読者の視点から見る」ということではないだろうか。

いまの日本の「世界で日本文化がどう読まれているか」という語りかたが日本中心の視点ではないか、という問いかけに対し、「それで何が悪いのか。よ

出題傾向

- 入試では、文章の内容をまとめるさまざまな字数の記述問題の他、文章を踏まえて自分の意見を書く条件作文のような問題も出題される。
- 指定字数の八割以上は書くようにしよう。

いものは必ずいつか伝わるのだから、本物の日本文化をそのままに発信することのほうが重要だ」と考える人もいるだろう。確かに、日本では、説明せず黙って自分の信ずることを行うことは「つつましさ」として評価されることが多い。欧米では、日本文化などのアジアの文化は、（よくも悪くも）簡単に言葉に表すことのできない、神秘的な文化というイメージがあるとされてきたし、そのことにより日本文化が尊敬のまなざしで見られてきたという一面もある。しかし、世界中の人々が日本の文化に接する機会が増え、日本の文化についての情報があふれている現在、③そのような職人芸的な姿勢だけでは、かえって誤解を生み、広げてしまうことが多いのではないだろうか。

　自分と同じ常識を共有していない世界の人々に、自分の考えをわかりやすく伝えることは、現代の世界に生きるうえで重要なスキルになりつつある。そして、そのためには、そうした人々が何を考えているかを想像することが必要不可欠だ。このことは、日本の文化の伝えかたに限らず、日本で作られた製品や作品を世界にどう届けるか、また、価値観の違いをめぐって外国と摩擦があったときに海外に向けてどう説明するか、という問題にも通じるだろう。

　日本中心のものの見かたから自由になり、世界の読者の視点をとることができるようになれば、その方法を④使って、より幅広い日本文化を、より多様な受け手の視点から見ることができ、日本文化の新たな魅力、深さを知ることができるようになる。

〈河野至恩「世界の読者に伝えるということ」より〉

(1)　□　A・Bに当てはまる言葉の組み合わせとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　A　しかし　B　また
イ　A　すなわち　B　あるいは
ウ　A　ただし　B　だが
エ　A　なぜなら　B　たとえば

(2)　線①「このような考えかた」について説明した次の文の□に当てはまる言葉を、文章中から八字で抜き出しなさい。

▪日本文化を□から見るという考えかた。

(3)　線②「日本文化論的な安易な結論に導いてしまう」とは、どういうことですか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　日本人が興味をもっている話題を紹介すれば、外国人も興味をもつだろうと信じてしまうこと。
イ　日本人が興味をもっている話題を紹介すれば、海外で日本文化が評価されると考えてしまうこと。
ウ　日本の文化が海外で人気がある理由を、グローバル化が進んだためだと決めつけてしまうこと。
エ　日本の文化が海外で人気がある理由を、日本人が考える日本人の国民性に結びつけてしまうこと。

□

(4)　線③「職人芸的な姿勢だけでは、かえって誤解を生み」について、次の各問いに答えなさい。

1　「職人芸的な姿勢」とは、どのような姿勢ですか。三十五字以内で書きなさい。

⬅問題は次ページに続きます。

2　「誤解」とは、誰がどのように思い込むことですか。六十字以内で書きなさい。

(5)　線④「日本文化の新たな魅力、深さを知る」とは、どういうことですか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　日本文化が世界から尊敬のまなざしで見られてきた歴史に向き合うことで、日本文化が海外で人気がある真の理由に気づくこと。

イ　海外で日本文化がどのように見られているかを想像することで、日本人自身が気づかなかった日本文化のすばらしさに気づくこと。

ウ　日本から遠い文化で生まれた製品や作品に触れることで、他の国には見られない日本文化の独自性や神秘性に気づくこと。

エ　日本人自身が日本の文化や歴史について積極的に学ぶことで、世界中に発信していくべき日本文化の奥深さや幅広さに気づくこと。

(6)　日本政府観光局が実施した、外国人が日本旅行中に感じた不便な点についての調査で、最も多かった回答は「言葉に関する問題」でした。その解消の方法について、次の1～3の条件にしたがって、あなたの考えを書きなさい。

［条件］

1　不便さを感じた場面を推測して述べ、その解消の方法について具体的に書くこと。

2　六行以上八行以下で書くこと。

3　原稿用紙の正しい使い方にしたがって、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

8　6

アドバイス

論説文では、(6)のように、文章の内容と関わりのあるテーマについて自分の考えをまとめる条件作文が出題されることがある。文章で筆者が述べている内容を踏まえて、自分の考えをまとめるようにしよう。また、解答するときは、与えられた「条件」や「注意」などを必ず守ろう。

発展問題

▲△▲　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈宮崎〉

中学二年生の葉山理央は、鷹を自在に操る*鷹匠にあこがれ、鷹のモコを飼っている。しかし、モコの訓練は思うように進まず、親友の康太や舞子の忠告にも、耳を傾ける余裕がない。

ある日、理央は、モコを連れて、鷹匠である平橋さんが飼っている花太郎（花ちゃん）を見に行った。

タカはまっすぐに翼を広げたまま、空を飛んでいる。ときどき体を傾けると、翼は天に向かって伸び、まさに帆船のマストみたいに見える。

まるで大海原を進むような、花太郎。体が傾くたびに、すうっと高度があがる。帆が風の力を借りて進むように、翼で風を受けているのだ。

「気持ちよさそう」

途中までは人と同じ進化を遂げながら、神から空を飛ぶことを許された動物、鳥。

花太郎はゆったりと全身を風にあずけている。あるがままの姿だ。見ているこちらまでも、ゆったりとした気分になる。あれにくらべればモコの飛翔など、磯遊びみたいなものだ。

モコのことを思い出し、ついふきだしそうになっていると、平橋さんは言った。

「すごく楽々と飛んでいるように見えるでしょう。でも、あれ、意外に細かい技術が必要なんよ」

「細かい技術？」

「尾羽をよく見てみて。少しずつ左右に傾けて、微妙なバランスをとっとるのがわかるよ」

「えっ、そうなんですか」

理央は、すべるように風に乗る花太郎の尾羽に目を凝らしてみた。

「あ、ほんとう」

確かに両翼は広げたままだが、尾羽のほうは、かじを切るように左右に傾けている。

「軽くやってのけているように見えても、その裏には、繊細な技術が必要なんよね」

①平橋さんの言葉は、すかんと開いた空にしんなりとしみこんでいくようだった。

しばらくして平橋さんは笛を吹き、花太郎を戻した。

「おつかれさま」

*ヒヨコをついばむ花太郎に、ねぎらいの言葉をかける。

花太郎の行動をモコはどう見ていたのだろうか。花太郎が飛んでいるあいだ、理央の腕に止まっていたモコは、上空の雄姿にさして関心は持っていないようだった。

「モコちゃんもやってみる？」

「……はい」

とまどいながらもモコを見る。

飛んでくれるだろうか。

理央は、風に向かって立った。

「モコ、行くよ」

笛をくわえる。

②がんばれ、モコ。

モコに念を送って、笛を吹く。

「ピッ」

モコは飛び立った。

行けっ、モコ。

理央は両手をにぎりしめる。けれどやはりモコの体は思うようにはあがらなかった。低いところを小さくひとまわりして、近くにあった倉庫の屋根に止まってしまった。

「モコ、がんばれ」
理央は声をはりあげたが、もう役目は終えたとばかりにじっと羽を閉じている。しかたなく理央は笛を吹いて、腕に戻した。
「じつはモコ、このごろあんまり飛ばないんです」
戻ってきたモコを見ながら、理央はため息をつく。
「どのくらいの頻度で飛ばしとるの？」
「週に二回」
答えると、平橋さんは少し首をかしげた。
「タカによってちがうかもしれんけど、それはちょっときついかもしれんねえ」
「でも、モコは訓練が遅れたし、がんばらんといけんから」
「気持ちはわかるけど」
平橋さんは、前置きをしてこう言った。
「理央ちゃん、少しあせっとるかもしれんね」
康太にも同じことを言われたばかりで理央は苦笑いをした。
「鷹匠の条件って知っとる？」
「いいえ」
「愛、知、威。前に読んだ本に書いてあったよ」
平橋さんは地面に漢字を書いて示した。
「③タカを愛し、よく知り、威厳を持って接する。それが、大自然の理に溶けこんでいくことだって」
「大自然の理に溶けこむ？」
「うん。かんたんに言ったら、自然の声をよくきくってことかな。自然は自分の思うようにはならんでしょ。おしつけたって無理。それどころかすごく敏感だから、こちらのあせりやいらだちを感じて反発する。そうすると関係がこじれることがあるよ」
「……はい」
このところの訓練のやりづらさに、舞子とのやりとりが重なって思い出されて、理央はくちびるをかんだ。

「飼い主は、動物の本能を尊重する覚悟を持ったほうがいいよ。コントロールする技術はそのあといくらでもつくから、まずは広い心を持つこと」
「広い心……」
ひりりと痛むような言葉だった。
実際、なかなか思うように飛ばないモコがくやしかった。何度か見せてもらった花ちゃんとは大ちがいなのはまだしも、カラスやハトにも負けている。タカなのにとじりじりした。だから、一生懸命に訓練した。
けれど自分が躍起になればなるほど、モコの能力は後退していく。どうしていいのか、わからなくなっていた。モコにはモコのペースがあったのに、自分の気持ちしかわからなくなっていた。
④モコ、ごめんね。
理央は腕のモコに心のなかであやまった。ちょこんと腕に乗っているモコが、かわいらしくて、鼻の奥がつんと痛くなった。

〈まはら三桃「鷹のように帆をあげて」より〉

（注）鷹匠＝調教した鷹を使って、小動物を捕らえさせる人。
ヒヨコ＝平橋さんは、肉食の鷹のエサとして、養鶏業者からヒヨコ（冷凍したもの）を分けてもらい、花太郎に与えている。

(1) ――線①「平橋さんの言葉は、すかんと開いた空にしんなりとしみこんでいくようだった。」とありますが、「平橋さんの言葉が空にしみこむ」とは、どのようなことを表していますか。別の言葉で説明した次の文の□に当てはまる言葉を、十五字以内で書きなさい。

▪平橋さんの言ったことが、□ということ。

(2)　線③「タカを愛し、よく知り、威厳を持って接する。」について、「平橋さん」の気持ちを想像して朗読するとき、その読み方として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　厳しい口調で、発音に強弱をつけ、説得するように読む。
イ　柔らかな口調で、語尾を長く伸ばし、慰(なぐさ)めるように読む。
ウ　静かな口調で、全く抑揚をつけず、報告するように読む。
エ　穏(おだ)やかな口調で、ゆっくりと間を取り、諭すように読む。

□

(3)　線②「がんばれ、モコ。」と線④「モコ、ごめんね。」とでは、「理央」の「モコ」に対する気持ちが変化しています。「理央」の気持ちの変化を、そのきっかけとなったことも含めて、九十字以内で説明しなさい。

(4)　この文章の表現について説明したものとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　色彩を表す言葉をふんだんに使うことによって、視覚的な華やかさを強く印象づけている。
イ　擬音語やカタカナの表現を織り交ぜることによって、文章全体に軽快な感じを与えている。
ウ　比喩表現を多く用いることによって、眼前に広がる情景をイメージ豊かに描き出している。
エ　話の中に回想の場面を入れることによって、客観的な事実を鮮明に浮かび上がらせている。

□

アドバイス

国語の記述問題には、十字程度の短いものから、(3)の九十字のように相当な字数を書かせるものまで、さまざまなものがある。「○字以上△字以内」とある場合はその字数内でまとめればよいが、「○字以内」だけの場合は、八割以上は書くこと。できれば、九割以上書くことを心がけよう。

記述問題を解くときは、答えに必要な「要素」を押さえることが重要になる。一つだけのときもあるが、複数の「要素」が必要なときもあるので、取りこぼしのないように読む。ほとんどの設問では文章中に答えの「要素」が書かれていて、その言葉を使ってまとめることができるので、適切な部分を見きわめて書くようにしよう。

「要素」を全てつなげると、指定字数に近い文字数になる。文字数が極端に異なるときは、「要素」の数が違うか、より適切な表現が文章中にある可能性があるので、文章をもう一度確認してみよう。

解答をまとめるときは、文末表現にも注意する。設問にあわせて、「……こと。」「……から。」「……気持ち。」など、どのような言葉でまとめるべきかを考えよう。